

2. 創作は生活の延長にある——自立と偶然が開く表現の基盤

創作は生活の延長として構造化される

芸術表現はしばしば「日常から切り離された特権領域」と見なされる。しかしながら実際には、創作は生活の延長線上にあり、生活基盤のあり方によってその質は大きく左右される。芸術家という存在は、ともすれば社会性の乏しさを美化される傾向がある。日常の維持や社会的折り合いへの無関心が、個性の証明であるかのように扱われる場合すらある。とはいものの、歴史に名を残すごく一部の天才を除けば、大多数の表現者は社会との接点を維持しつつ生きるしかない。生活と創作は対立する概念ではなく、相互に浸透し合う構造を成しているのである。

若年期には「自分は他者とは異なる存在である」という万能感が錯覚的に生じる。だが年齢を重ね、社会の現実と摩擦を経験する過程で、人は次第に「自分は天才ではなく、天才に憧れる普通の人間である」ことを理解する。その気付きは敗北の宣告ではなく、むしろ生の第二幕の開幕を意味する。幻想を脱ぎ捨てたところから、ようやく自らの表現を現実の地平に定着させる作業が始まるのである。

自立の欠如は創作を曇らせる

とはいっても、一部には青年期の幻想を引きずったまま大人になりきれない者もいる。自己像の修正を拒み、社会との適切な距離を測れず、不本意な孤立に陥る者たちである。「芸術家という狼の群れ」の中に身を置き、成熟した狼たちにやさしく受け入れられることで、未成熟な自分も狼であるかの錯覚を抱く。その矛盾が、自尊心と不安を同時に増幅させ、創作そのものを曇らせる。

私も長年音楽に携わってきた関係で、若い表現者の相談を受けることがある。一見すると創作上の悩みに見えるが、実際には生活構造そのものが混乱しているケースが少なくない。私はしばしば「あなたの抱えている問題のいくつかは、一人暮らしを始めることで意外に解決する」と考え、言ってもよさそうであればそう伝える。だがそれは当人には不可解に聞こえるらしい。作品の悩みに対し、なぜ生活の話をするのかと。

だが表現とは生活の延長である。自らの衣食住すら管理できない状態で、他者の心を動かす表現を生み出すことは困難である。「自分のパンツを自分で洗うところから開ける